

# 水沢市の都市化について

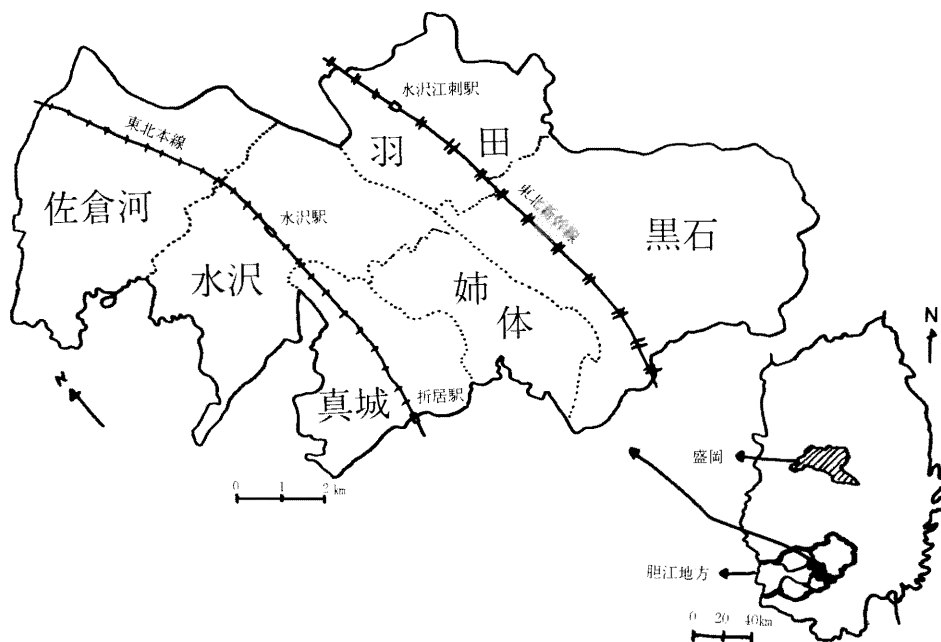
山本 暁雄

## I. はじめに

戦後の急激な経済成長は、日本国内の急激な都市化を引き起こし、地理学者の間でも都市化の研究が盛んになったが、地方中小都市を扱った研究は少ない。そこで本論では地方小都市の都市化の事例として岩手県水沢市を取り上げ、市街地の拡大と地域における商業的地位を中心に分析することを目的とする。本論ではまず岩手県全体と水沢市を比較し、水沢市への都市的産業の集積を見る。次に戦後の市街地拡大を行政区の人口密度の変化から分析する。最後に小売・卸売業に関して胆江地区の各市町村と比較を行なう。使用した主な資料は岩手県統計年鑑と水沢市統計書である。

## II. 水沢市の概観

対象地域である水沢市は、岩手県南部の中央に位置する（第1図）。北上川沿いの平野と胆沢扇状地が広がり、周囲は山地である。市街地は主に北上川の西岸にあり、東岸は平野が狭く市街地も



第1図 対象地域

狭い。市域内にはJR東北本線、国道4号線が通り、羽田地区には東北新幹線水沢江刺駅があり、交通アクセスの状況はかなりよい。現在につながる市街地が形成されたのは中世末に留守氏の居城となってからである。小城下町が発展し、さらに奥州街道の宿場町、北上川を利用した商取引の場としての機能もあわせ持ち、商業機能の集積を高めた。

### Ⅲ. 水沢市の都市化

#### (1) 人口動態

平成7年1月1日現在の水沢市の人口は59,444人、世帯数は19,489世帯である。昭和29年の市制施行時は人口42,793人、世帯数7,753世帯で、それぞれの伸び率を比較すると人口が38.9%、世帯数が151%の増加であり、この急激な核家族化が住宅需要を増大させ、市街地を拡大させたと予想される。

#### (2) 地区別人口動態

水沢地区は大幅な増加を示し、羽田地区はほぼ一定、佐倉河・真城・姉体の各地区は一時人口が減少し、その後回復した。黒石地区はほぼ一貫して人口が減少している。

#### (3) 産業の動向

水沢市の第2次・第3次という都市型産業の就業者率は岩手県全体に比べて高いが、特に第3次産業の割合が目立って高い。

水沢市は稲作中心の農業が行なわれている。専兼業別農家数を見ると、特に昭和45年から50年の間に第2種兼業農家が大きな伸びを示している。これは誘致企業の立地と大きな関連があると思われる。平成2年の時点で第2種兼業農家の占める割合が県平均を大きく上回ることからも水沢市への都市型産業の集積が予想される。

現在、水沢市の製造業において中心的な地位を占めているのは電気機器関連の業種である。電気機器関連の企業は昭和40年代から50年代にかけて立地した誘致企業に多い。

水沢市は城下町で宿場町であったという歴史的要因から、商業機能が集積してきた。水沢市の商店街は城（現市役所）の東側に発達した。江戸時代の町並みは、城の主に西方から南西にかけて下中屋敷と呼ばれる武家屋敷が広がり、町屋敷と呼ばれる町人町はそれらの東側に広がっていた。

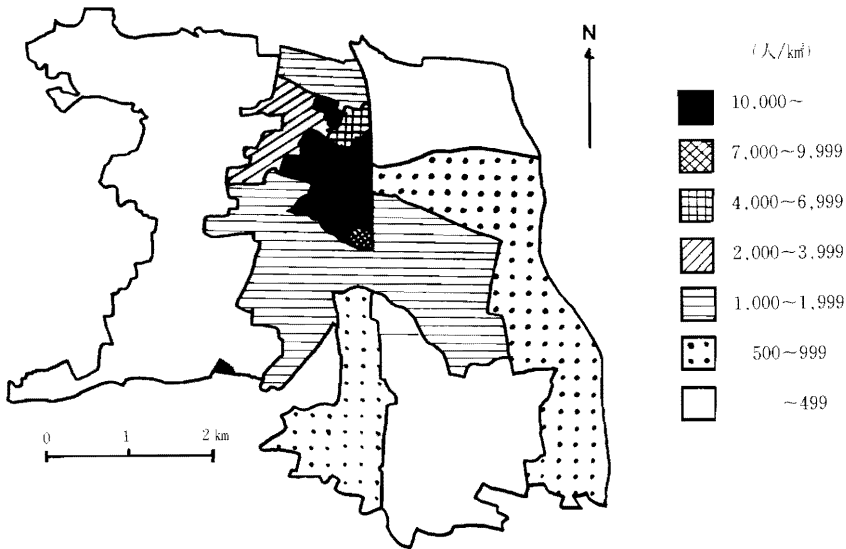
### Ⅳ. 市街地の拡大

水沢市の行政区は現在107区である。この章では行政区の人口密度の変化から市街地拡大を検討する。なお、羽田・黒石地区は、市の中心から遠くその影響を受けにくいと予想されるため対象か

ら除いた。検討する年次は昭和36年，昭和50年，平成2年と平成6年である。資料は水沢市住民登録基本台帳による。

### (1) 昭和36年の人口分布

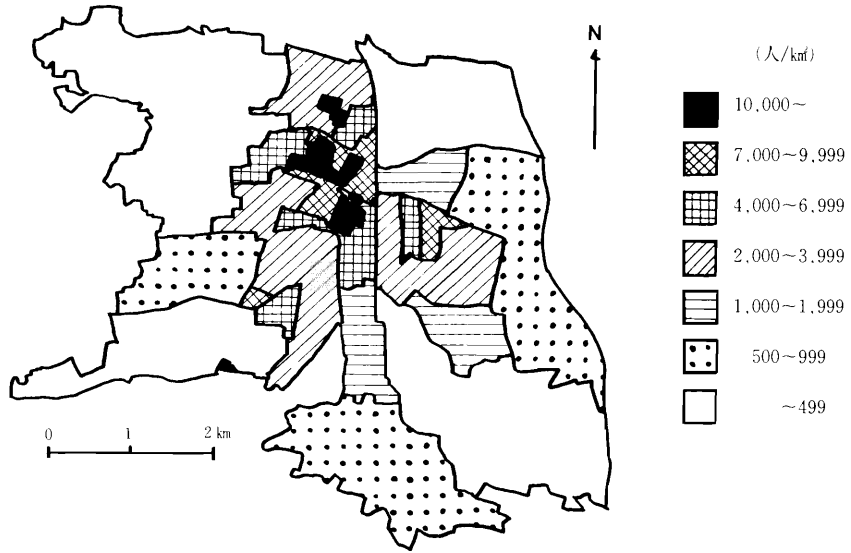
この時期目につくのは市の中心部への人口集中である。ここは江戸時代の町人町に由来する地域で、この地域と市役所のある大手町とその周辺部や駅通り、春日町、青葉町で特に高い値を示している。この地域は商店が多く、個人経営の小規模店が密集していた。郊外地域は農村地帯であり、人口密度は低い。駅南東の地域は北上川水運の蔵のおかれた所であり、姉体地区の宿同様歴史的な要因による。真城地区で比較的高い人口密度を示した地域は、中世以前からの豪族屋敷があったという歴史的背景、国道4号線沿いという交通面での利点によるものであろう（第2図）。



第2図 昭和36年の人口分布（水沢市住民登録基本台帳より作成）

### (2) 昭和50年の人口分布

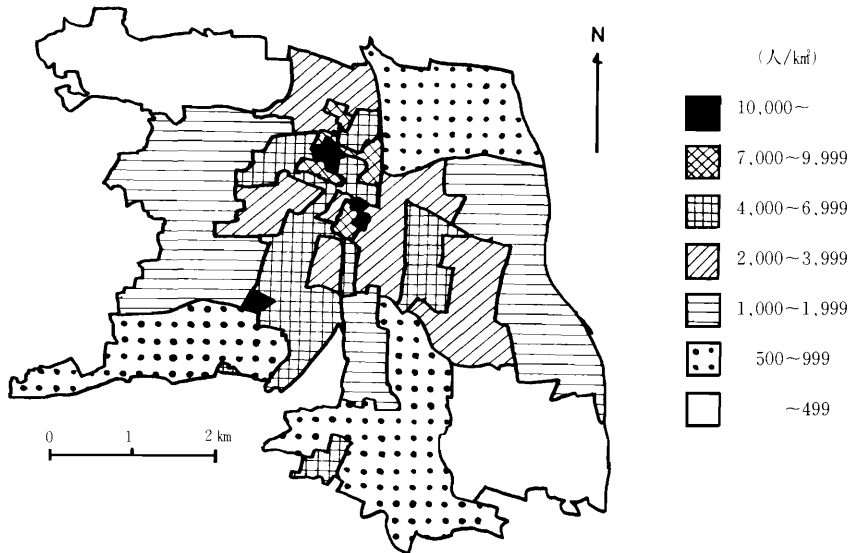
中心市街地を見ても、東北本線沿いと旧市街地での人口減少が目につく。これらの地域は居住環境がよいとは言えず、このためより良い環境を求めて中心市街地に隣接した水沢駅の東側やさらにその外側の地域に移動した。この人口移動の要因として、宅地の造成や団地の建設があげられ、人口が増加している地域と住宅・団地のある地域はほぼ一致している。ただここで注意したいのは人口密度が高くなった地域が必ずしも住宅・団地が建設された地域であるとは限らず、その周辺地域でも人口の増加が見られることである。水沢駅東側の地域は、昭和45年の国道4号線水沢東バイパスの開通と昭和46年の水沢駅地下通路の開通によって市中心部の商店街への交通アクセスが改善され、急速に宅地化した。姉体地区の上中野は、誘致企業である日立水沢製作所が昭和42年に立地し、それに隣接して県営住宅が建設されたため、人口が一気に増加した（第3図）。



第3図 昭和50年の人口分布（水沢市住民登録基本台帳より作成）

### (3) 平成2年の人口分布

この時期、急速に宅地の郊外化が進んでいる。中心部の人口は減少し、特に水沢駅周辺での人口流出が著しい。主な人口移動の方向は水沢駅から見て東の方向と線路の西側全般に見られる。特に顕著な人口増加は駅の南西方向に見られる。この動きは団地の造成によるものであるが、それとともに交通事情の問題もあると考えられる。大手町西・東とその周辺は旧武家屋敷の地域で、現在も道が細かく入り組み自動車での移動に適さない。それに対し駅南東の大鐘・川端では、新興住宅の

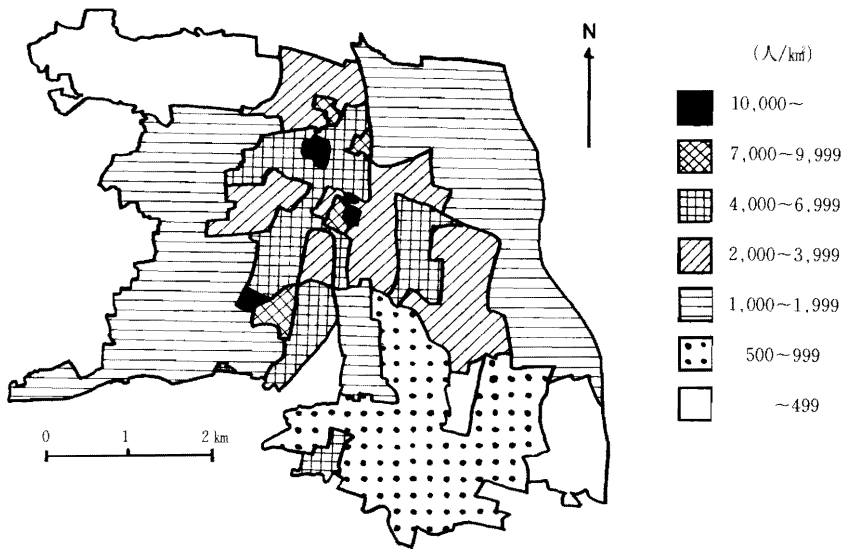


第4図 平成2年の人口分布（水沢市住民登録基本台帳より作成）

ため道路もある程度広く、自動車での移動もしやすい。現在の高い自動車保有率から考えて、道路事情は今後の市街地の展開に大きな影響を与えていくであろう（第4図）。

#### (4) 平成7年の人口分布

人口移動の方向自体には変わりなく、人口移動の主体が旧市街地周辺からさらにその外側に移っている。姉体地区の上姉体での人口増加は住宅の分譲によるものだが、この地域では大規模な宅地開発がすすんでおり、今後も急速に宅地化が進むであろう（第5図）。



第5図 平成7年の人口分布（水沢市住民登録基本台帳より作成）

## V. 水沢市商業の胆江地区における地位

胆江地区とは水沢市・江刺市・金ヶ崎町・胆沢町・前沢町・衣川村からなる。水沢市は胆江地区全体を商圏におさめ、最も商業の集積した地域になっている。第1表では胆江地区と水沢市の小売・卸売業の店舗数と従業員数、その構成比を示した。中でも卸売業の集積が目につき、平成3年には店舗数は77.0%、従業員数も86.7%を占めている。卸売業が集積している理由として他の地域への交通アクセスが良いこと、小売店が多いこと、また、市内に大きな卸売施設があることがあげられる。反対に小売業では分散傾向が見られる。それを表す現象として市街地の交通量の減少があげられ、買い物客の足が市街地から郊外や他の市町村に向かっていると予想される。また近年周辺市町村への大型店の立地が相次いでおり、市中心部の商店街の地位の低下が起ころうであろう。

表1 岩手県・胆江地区(水沢含む)・水沢市の小売・卸売業の集積

a) 店舗数 (単位：店) カッコ内は構成比

		昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成3年
岩手県	小売	20,140(90.4)	21,391(87.2)	22,767(85.0)	21,334(84.5)	20,682(83.3)
	卸売	2,142(9.6)	3,139(12.8)	4,002(15.0)	3,910(15.5)	4,144(16.7)
胆江地区	小売	2,000(88.4)	2,251(85.6)	2,359(84.9)	2,195(85.0)	2,119(83.3)
	卸売	263(11.6)	379(14.4)	419(15.1)	388(15.0)	426(16.7)
水沢市	小売	885(83.7)	1,050(78.5)	1,099(79.2)	1,066(78.6)	1,050(76.2)
	卸売	172(16.2)	288(21.5)	288(20.8)	291(21.4)	328(13.8)
胆江における 水沢の割合	小売	44.2%	46.6%	46.6%	48.6%	49.6%
	卸売	65.4%	76.0%	68.7%	75.0%	77.0%

b) 従業員数 (単位：人) カッコ内は構成比

		昭和45年	昭和50年	昭和55年	昭和60年	平成3年
岩手県	小売	63,810(75.6)	69,490(70.5)	79,621(70.8)	83,153(72.9)	82,559(71.1)
	卸売	20,576(24.4)	29,025(29.5)	32,898(29.2)	30,846(27.1)	33,571(28.9)
胆江地区	小売	6,747(77.3)	7,609(73.1)	8,306(73.0)	8,766(76.6)	8,273(72.7)
	卸売	1,981(22.7)	2,796(26.9)	3,078(27.0)	2,676(23.4)	3,105(27.3)
水沢市	小売	3,754(68.9)	4,410(64.5)	4,817(65.1)	5,047(68.5)	4,886(64.5)
	卸売	1,699(31.1)	2,423(35.5)	2,579(34.9)	2,323(31.5)	2,691(35.5)
胆江における 水沢の割合	小売	55.6%	58.0%	58.0%	57.6%	59.1%
	卸売	85.8%	86.7%	83.8%	86.8%	86.7%

(水沢商工会議所資料より作成)

## VI. まとめ

以上、水沢市の都市化について、市街地の拡大と地域における商業的地位の点から考察した結果、以下のことが明らかになった。

- (1) 昭和36年当時、人口は旧城下町および歴史的に栄えた地域に集中していた。昭和50年になると人口が旧城下町の周辺地区に移動し、旧城下町にあたる古い市街地では人口が減少した。その人口移動の原動力は中心部の人口圧、市や県による団地の建設と宅地の造成であり、それが呼び水となり市街地が拡大した。人口移動の方向は東北本線西側の北方向と南西方向および水沢駅の東方向で、これは地域の道路事情によるところが大きい。平成2年には人口移動がより外側の地域に広がった。平成7年でも同様であり、中心部の人口は減り続けている。現在さらに外側の姉妹地区の北部、水沢地区南西部で市による宅地の造成が行なわれており、今後その方向に市街地が拡大するであろう。
- (2) 水沢市は胆江地区において、年々商業的地位を高めてきた。特に卸売業の集積が見られる。

小売業は近年周辺地域への大型店の立地が進み、また交通事情からも中心商店街の相対的な地位の低下が予想される。

全体的にいて水沢市の都市化は歴史的な要因に強く影響されていると思われる。水沢市は現在大規模な区画整理によって城下町的な町割りを消そうとしているが、それにより市街地にどのような変化が起こるのであろうか。今後関心のもたれる点である。

最後に本論作成にあたり御指導をいただいた水野先生並びに後藤先生、資料の収集に御協力いただいた水沢市役所の千田さんに心から御礼を申し上げます。

## 参考文献

1. 吉沢 郁(1985)：青森市の都市化～昭和40年以降を中心として～ 弘大地理21, 63～70
2. 服部銈二郎(1973)：「都市化の地理」 古今書院 321ページ
3. 山鹿誠次(1973)：「都市の研究と診断」 大明堂 276ページ